優秀賞

残していきたい大切なもの

福島県会津若松市立第一中学校
１年　池田　玲菜

私のふるさとは福島県大熊町です。とはいっても、私は２歳までしか住んでいなかったので、本当のふるさとの姿や、近所に住んでいらっしゃったはずの人たちの顔も覚えていません。今から 11 年以上前に起こった東日本大震災は、多くの人たちから、ふるさとも思い出も、伝統も、多くのものを一度に奪っていきました。私の知っている大熊町は、母の口から語られる話から想像するだけのものですが、とても美しく、人々が温かく、おいしい食べ物がたくさんある素敵な町です。

今では、他地域に住んで、そこで復興した「大熊の梨」や「キウイ」などが店先にも並ぶようになり、母が買ってきては、うれしそうに思い出話とともに食卓に上ります。

でも、今になっても復興されない伝統的な食品があります。それは「しいたけ味噌」です。これは、小学校５年生で行った調べ学習で初めて知ったものです。しかも、大熊町のしいたけ農家の方が「大熊町に特産品を作ろう」と思い、５年もの年月をかけて、さまざまに試行錯誤をして、何度も何度も失敗を繰り返しながら、ようやく理想の形に作り上げることができたものだそうです。製造者は自分が生まれ育ったふるさとを大事に思い、ふるさとの特産品として広くみんなに大熊町のことを知ってもらおうと思って作ったもので、その努力がつまったものだということです。母からも、そのおいしさについて聞くにつれ、自分たちで作りたいと考え、学校のみんなで実際に作ってみました。味見をしてくださった大熊町の方々から「おいしい」と評価していただきましたが、母に言わせると「もっともっと深い味わいで、ご飯にのせても、魚や豆腐にのせても、主役を引き立てながらも、きちんとだしの利いた味噌」だったそうです。

その味噌を作ってくださった方々の思いや、その特産品を愛していた人たちの思いをどうにかして伝えられないだろうかという考えが、あの頃から私の心の中にずうっと残っています。何度調べても、今は誰も作っていない「しいたけ味噌」です。製品の製造に５年もかけたというのに、震災で途絶えてしまっているという事実が残念でなりません。寂しさや、途絶えさせてはいけないのではないかという思いで、製造者が作ったというレシピを見ながら、何度も家で挑戦してみています。

調べ学習でわかった苦労や製造者の思い、実際に作ってみて感じた難しさな

どを通して、改めて「だからこそ、震災で途切れてしまっていたことは、私たちが復活させなければならないのではないか。」と漠然と考えています。

少しずつ町が復興していっています。元々の住民も少しずつふるさとに戻っていき始めています。それでも、まだまだ道半ばです。町並みも変わり、写真に残っている家並みは見られません。私も将来的には大熊町に戻り、大熊町の住民として、町の完全復興のために貢献していきたいと考えています。そのとっかかりとして「しいたけ味噌」の復興が私の今の夢です。もちろん、それだけでなく、さまざまな伝統芸能や文化も私たちの手で復興させ、守っていきたいと考えています。

実は今年、大熊町で祭りが開催され、大熊町の無形民俗文化財の「熊川稚児鹿舞」も発表されたそうです。数年前から、新聞でも取り上げられ、避難している地域で練習に励んでいる人がたくさんいると聞いて、うらやましく思っていたものです。そのため、その祭りを見に行きたいと思っていたのですが、私も部活動の練習があったし、家族の予定が合わなかったことで、残念ながら見送りました。

でも、私には夢があります。いつか、見る側ではなく、主催者側として祭りを盛り上げていきたいと思っています。自分が生まれて２年間を過ごしたふるさとを「ここが私のふるさと大熊町です。」と胸を張って言えるようにしたいのです。家族が愛していたふるさとの素晴らしさを、いつの日にか、必ず自分の手で取り戻したいと思います。

それが今の私の夢であり、未来の自分に期待している願いです。その日まで、今できることに全力で取り組み、力を蓄えていくつもりです。